

Ⅳ 本校生徒の生徒会に対する意識と問題点

1. 生徒会活動についてのアンケートとその結果

生徒会活動に対する生徒の意識を知るために、高校生全員に対して45年10月にアンケートを実施した。その結果は第1表～第6表に示す通りである。

大部分の生徒が生徒会の存在意義を認め、必要性を感じてはいるが、いざ自分で活動するとなると二の足を踏むのである。無関心派や生徒会不要論者もかなり多くいるが、これらは生徒会そのものが不要と考えているというよりはむしろ現状に対する不満の表明と思われる。

第1表 生徒会の必要性をどの程度感じるか

	1年計	2年計	3年計	合計
絶対必要	72	61	48	181
少しは必要	21	31	33	85
何ともいえない	23	17	22	62
どちらかといえば不必要	5	5	9	19
不必要	11	9	12	32

第2表 生徒会は何のためにあると思うか

	1年計	2年計	3年計	合計
学校や社会に対し生徒としての要求や意見を出し、また行動するため	55	54	38	147
学校に対し生徒から出て来た意見や要求を出すため	49	49	39	137
民主主義のルールを身につける訓練の場	9	9	9	27
学校生活の身近な問題をとりあげ、解決するため	47	46	46	139
クラブ活動その他総括奉仕機関	14	14	17	45

その他 ○あらゆる可能性を伸すため ○協調性をやしなうため ○生徒の象徴であり指導役である
○学校権力に対抗するため ○生徒の気運をもちあげるため

第3表 なぜ生徒会を不必要と思うか

	1年計	2年計	3年計	合計
いずれにせよ学校の御用機関にすぎない	14	11	13	38
今の生徒会では何の役にも立たない	20	23	29	72
一部の特殊な生徒に独占されてしまう	10	10	10	30

その他 ○教師に左右されてしまう ○真の生徒の意見が出てこない ○学校は勉強するところである

第4表 生徒会活動についての関心・参加の仕方はどうか

	1年計	2年計	3年計	合計
積極的に関心あり	12	15	8	35
少しは関心あり	30	42	32	104
何ともいえない	33	22	22	77
あまり関心なし	36	23	27	86
消極的無関心	22	24	41	87

第5表 生徒会活動に関心のない（参加しない）理由

	1年	2年	3年	合計
生徒会の内容がよくわからない	14	4	3	21
身近でない、我々のものと感じない	6	6	8	20
魅力がない、面白くない	0	9	8	17
性格に合わない、やりたくない	3	5	6	14
くだらない、ばかばかしい	4	4	5	13
生徒会に力がない	2	3	5	10
クラブや勉強で暇・機会がない	3	2	5	10
HRと生徒会が密接でない	3	4	0	7
一部の生徒に独占されている	2	1	2	5
恐ろしくて入りにくい	1	0	0	1

第6表 生徒会でとりあげてほしいこと

	1年	2年	3年	合計
制服・制帽問題	18	15	10	43
クラブ全入制問題	17	8	6	31
生徒会のあり方, 生徒会機構の再検討	4	14	3	21
クラブ部室の新設	9	2	0	11
金大戦 (対金沢大附高戦)	4	4	1	9
生協の利用の問題	7	0	0	7
文化祭の改善	2	0	3	5
政治活動	2	2	0	4
校内美化	2	0	0	2
HRとの関係・連絡の強化	0	2	0	2

その他 ○クラブ費配分のアンバランス ○更衣室の改善 ○運動場整備 ○バックネットの新設 ○パン値下げ ○男女交際 ○受験体制 ○中学と高校との分離 ○学校が生徒を無視できないようにする ○クラブ活動の日をつくる ○教官の授業態度とその改善 ○教官会議の傍聴 ○朝礼の廃止 ○他校との交流 ○諸規則の再検討 ○選択科目の増加 ○生徒議会の決定は教官会議の承認なしに全面的に有効にすること ○前期からの懸案の解決 etc.

2. 本年度の生徒会の状況

(1) 2.11事件

本年度以前の概況は前述の通りであるが、ここで2.11事件についてつけ加えておきたい。

一昨年秋頃、本校にも自称「全闘委」なるものが生まれ、昨年度末(3月)頃まで活発な動きを見せた。(最近はやや鳴りをひそめている)。特に45年2月11日の事件は大きな紛争のきっかけになりかねないものであったが、これはおよそ次のようなものであった。

2月11日の建国記念日に、「全闘委」のメンバーを中心とする生徒が出校し討論集会を開いた後外部で行なわれる他の集会に参加しようとしたところ、前日校内に隠しておいた「盛装」用のヘルメットがなくなっているのを発見した。実は、前夜校内を見回った教官側が校内各所に隠されているヘルメット多数を発見し、「保管」したのであった。彼らはいったん引き下ったが、他校生徒の応援を求めて再び集まり、出校していた係教官らと「返せ」「返せない」の押問答となった。結局、数時間におよぶやりとりの末、ヘルメットの返却、生徒総会の開催、処分しないこと、父兄に連絡しないこと、など数項目の要求を残して引きあげ

た。

学校側は緊急教官会議を開いて徹夜で対応の仕方について協議した。その結果、今後校内に持ち込まないなどの条件をつけてヘルメットは返却し、HR討議や全校集会を開くなど、彼らの要求もいれるべきはいい、歩み寄るべきは歩み寄るとともに、わずかに残されている彼等の信頼感を頼りに、非を責めるべきは責め、お互いの信頼感を高め、事態の改善をはかろうとする努力が担任・係を中心にして続けられた。その間一口には言えない紆余曲折があったが、ともかく最悪の事態は避けることができた。しかし、この事件はその後に大きな影響を与えることとなったのである。

(2) 本年度の生徒会の動向

昨年度(44年度)後期に単独立候補し、信任投票の結果 $\frac{2}{3}$ 以上の票が得られず落選したA候補が、今回は同系のB候補とともに立候補した。これは、B候補はいわば当て馬であり、信任投票に持ち込むのを避けてA候補の当選を狙うものであった。

彼の立会演説会における公約は次のようなものであった。

- ① クラブ全入制の再検討。多様なサークル活動の方向へ
- ② 制服・制帽の再検討。問題を根本的にとらえる
- ③ 校内印刷物配布の自由化
- ④ 校内諸行事の再検討
- ⑤ 生徒会その他の自治活動の活発化
- ⑥ 政治活動についての学校側の意向をたず

B候補は当日欠席した。投票の結果は、投票総数398、有効票293、うちA候補191(48.0%)、B候補102(25.6%)、無効票105(26.4%)で、「全闘委」メンバーが生徒協議会長に就任することになったが、無効票が多いことが注目され、大部分は批判票であり高学年に多かった。

批判票の多さは彼の執行部「組閣」にかなりの影響を与え、「全闘委」的色彩を薄める結果になった。そして、代議員も「全闘委」メンバーはやや減少し、やる気のない代議員が増えた。

予算案の承認に意外に手間どり、5月いっぱいかかってやっと成立したありさまであった。高3議員のいやがらせの抵抗は新執行部への不信のあらわれと受けとれた。

6月より制服制帽問題に着手したが、性急な改革は望み得ない全体の雰囲気であり、進展を見ないまま夏休みに入り、その後この問題は柵上げの状態となり、結局時間切れで終わってしまった形である。しかし、「印刷物配布の自由化」および「政治活動についての非公式見解」についてはある程度の成果をみた。

こうしてほとんどの公約は見るべき成果なしに時間

切れで「口約」に終わってしまった形であるが、関係者の大きな努力で大きな混乱はなくすんだ。

生徒会の枠の中で全体の生徒をひっぱって行くことのむつかしさをさとしてか、委員長は途中で意欲を少なからず失なったように思われる。そして後期には「全闘委」は手を引く結果となった。「全闘委」派の動きが後退した後、生徒全般の無関心状況はむしろ以前よりひどくなったとも思われる。

こうした状況で迎えた後期役員選挙では、教官側の働きかけがあったにもかかわらず執行委員長への立候補者なしの状況となった。やむなく、前委員長が指名し協議会が承認するという間接制で選出することになったが引き受け手がなくて難航し、文化祭終了まで前期体制で進むという異常事態の末、ようやく後期委員長が決るといふありさまであった。しかしこういった傾向は本校のみでなく、他校にも多く見られたことであるという。

文化祭は1学期末よりアンケートを実施し、文化祭への一般生徒の希望を調査した。その結果例年と大差のないものに落着き、総じて低調であった。一般生徒の意見も広く取り入れてマンネリ化した文化祭を少しでも改革しようとした委員長の意図は実現しなかった。

後期生徒会執行部は、前記のように難産の末、「無所属」の委員長が選ばれてその下に活動を続けているわけであるが、力不足といった感じで全般に低調な活動状況である。

(3) 指導の具体例(その1)

前述のように、指導の一つのポイントとして、生徒協議会が宙に浮いたり独走しないで根の生えたものとするため、HRとの結びつきを重視し、協議会の模様や決議事項をクラスに確実に報告させるとともに、代議員がHRの総意を議会に反映させるよう指導に努めた。その具体例をあげてみたい。

4・28沖縄デーに数名の生徒が授業放棄をして校内で坐りこみをし、一部「全闘委」系議員の要求で協議会が開かれ、全校集会実施の要望が決議された。学校側では生徒全般の意向を知るべくHRの時間をもち、クラス討議をさせた結果、全校集会の要望は少なく、代議員の独走が非難されたクラスもあり、結局全校集会は実現しなかった。これは、代議員がHRの総意を代表しなければならないという代議員の心構えを、代議員のみならず一般生徒にも認識させるに役立ったと思われる。坐りこみ生徒については、家庭とも連絡を保ちつつ、担任・係を中心にして指導を続けた。

制服・制帽問題もHRでの討議やアンケート調査など生徒全体の意向をふまえながら慎重に取り組むようにした。結局、制帽を制服と切り離して扱うことになったが、全般の空気は性急な改革はできない雰囲気であ

あった。そして委員長の交代とともに休止状態となった。

(4) 指導の具体例(その2)

他方教官側は指導に当っては昨年度来の柔軟路線を継続している。激動する社会情勢の中で、従来常識とみなされていたことがらが急激に変化しつつあるが、このことを考慮に入れないで従来通りの基準を固執して指導を加えるとき、生徒との不要の摩擦を起し、混乱を招いて賢明な行き方でないことが多い。かといって、いわば教師側で先取りした形で与えるのにもまた問題があるように思われる。必ずしも望ましいことではないが、変化のテンポの早い時代には禁止→黙認→公認という形もやむを得ないこともあろう。

掲示物検閲制の廃止および印刷物の配布の自由化がこの例であり、制帽廃止の問題もこの途上にあると言えるかも知れない。しかし、黙認状態を長く放置して置くことには問題があり、早急に「けり」をつける必要に迫られている。

2・11事件をきっかけにして開かれた生徒集会において決議された生徒の政治活動についての教官側の非公式見解表明の要望については、早速、要望に答えるべく教官会議・研究会議において何回も議論し、協議をした。しかし、このことは各人の教育理念や思想と根本的に関わる問題であり、全員の一致した見解を出すことは至難の業であった。結局、曲りなりにもまとめあげて、「高校生の政治活動について」と題して生徒に発表したのが2学期に入った9月であったが、一応生徒の要望に副うことが出来たわけである。

3. 今後の問題点と指導のポイント

本年の指導を振りかえり、現状を眺めてみると、今後に残された問題は次のようなものとする。これらの多くは何年来の懸案でありながら解決をみていない古くて新しい問題であり、今後にまつところが多いが、二三の点については努力の結果多少の進展をみたように思う。

(1) 教師集団内の意志疎通と集団としてのまとまり

生徒指導には、生徒と教師との信頼関係が必要であることは論を待たないが、教師相互の十分な意志の疎通と、全員一致とはいかないまでも、集団としてのまとまりが不可欠である。この点に関しては、「政治活動についての非公式見解」をまとめる過程を通じてある程度の成果をみたとは思われるものの、十分と言うにはまだほど遠いものがある。

(2) 生徒の自治・自主性と教師の指導の調和

前出の「HRの自主活動についてのアンケート」に見られるごとく、一方では教師の指導を嫌う反

面、他方ではまた教師の指導を求めているわけである。一口に調和というが、真の調和は言うは易く行なうは難い問題である。柔軟路線と迎合・放任の峻別も必要であるわけであるが、実際の指導に当たっては、現在の社会情勢の中で、生徒による自主規制のむつかしさを経験し、暗たんとした気持になることが多い。

(3) 全体の意志を正しく反映した生徒会

生徒会のあるべき姿として全体の生徒の意志を正しく反映したものであることは当然である。HR指導に重点を置いたのも、HR⇔代議員⇔生徒議会のパイプがうまく通じて、生徒会が正しく機能することを目指したものであった。この点は既述のごとくある程度の改善が見られたと思うが、やはり今後に期するところが大きい。特に生徒会の系列をはみ出した「全闘委」の動向は今後の台風の目的なものとなろう。また校外とのつながりも、生徒(会)の自由意志で処理し切れなくなる羽目に陥る恐れがあるとともに、教師の指導の力のおよばないところへ行ってしまう恐れもあって、大きな問題を感じさせる。

(4) 積み重ねの必要性

執行部が変ることに関係ないことを取りあげたり、前の執行部のやりかたのことをまた一から始めて、結局いつも中途半端で終わってしまう無駄をなくして、今までの成果を引きつぎ積み上げて行くことの必要を痛感する。

(5) クラブ全入制の問題

本校のクラブ活動については別項で述べられている如き現状であり、問題点があるわけであるが、最大の関心事となっているのは、クラブの全入制か自由加入制かの問題である。これには本校での事情や歴史もあり、それぞれ長短があるが、どう落ち着くにせよ真剣な検討を加える時機にあることは確かである。

(6) 勉学に対する厳しさの要請

学校教育において勉学が大きなウエイトを占めることは言うまでもない。きちんとした学習指導を欠いて望ましい生徒指導など考えられないわけであるから、勉学に対する厳しさを要求することは当然である。しかし、厳しさを要請することが「詰めこみ主義」に墮してしまわないようにすべきではある。

以上無気力無関心の実態はある程度わかったが、その原因は依然としてはっきりしない。それをこんな風に推測する。生徒が、いろいろの問題を真剣に考え実行し解決しようとするとき、彼らの力だけではどうにも解決できないことも多い。そしてそういうとき、生徒が正しいとわれわれが判断したならば、その解決に向って生徒と一体となって立ち向うだけの誠意と勇気がわれわれ一人一人に、そして教師集団としてのわれわれの側になくしてはならない。そうした姿勢が果してわれわれに十分あるだろうか。それがわれわれ教師に欠けていることを、小中高と彼等は経験的に、あるいは本能的にか見抜いているのではないか。

勿論これだけですべてが片づくとは思われないが、しかしこのことを曖昧にしておいてどれだけ小手先の努力をくりかえしても、それは空しかろう。

もし生徒が正しければどこまでも生徒とともに進む勇気があるか、と自らに問うてみる。